

# パルメニデスのルート

——パルメニデス研究 I (下)——

山 川 偉 也

## 3. V. 11—17

ἐνθα πύλαι νυκτός τε καὶ ἡματός εἰσι κελεύθων,  
καὶ σφας ὑπέρθυρον ἀμφὶς ἔχει καὶ λάινος οὐδός·  
αὐτὰ δ' αἰθέριαι πλήνται μεγάλοισι θυρέτροις·  
τῶν δὲ Δίκη πολύποινος ἔχει κληῖδας ἀμοιβούς.  
15 τὴν δὴ παρφάμεναι κοῦραι μαλακοῖσι λόγοισιν  
πεῖσαν ἐπιφραδέως, ὥς σφιν βαλανωτὸν ὀχῆα  
ἀπτερέως ὤσειε πυλέων ἄπο·

この場面の、解釈を加える前の、おおざっぱなイメージを描いておこう。

「夜」と「昼」の通る門が立っている。門は、「そこに」(あるいは「あそこに」)を表わす ἐνθα という語によって表現される場所に立っている。その門は上に楣石、下に石でできている (λάινος) 敷居を抱いて立っている。そして、その門はまた αἰθέριαι という形容詞をもつ。大きな扉がその門を鎖している。その扉の κληῖδας ἀμοιβούς を持つのは πολύποινος という形容詞をもつ女神ディケーである。そのディケー女神に向って、乙女子たちは柔らかな言葉でもって巧みに話しかけ、門の扉を鎖している βαλανωτὸν ὀχῆα をすぐさまはずして欲しい、と説得する。

パルメニデスのルートを場所的に規定するにあたって肝要なことは、ἐνθα で表わされる場所、「夜」と「昼」の道の門 (πύλαι νυκτός τε καὶ ἡματος κελεύθων),

「石の」敷居 (λάϊνος οὐδός), アイテルの (αἰθέριαι) という形容詞をもつ門, πολύποινος という形容詞をもつディケー女神 (Δίκη), 複数形で ἀμοιβούς という形容詞をもつ鍵 (?) (κλεῖδας), これらを V.9 の「夜の家」(δῶματα νυκτός) に関連させて論ずることである。

まず「門」(πύλαι) から始める。この門は, Diels, Fränkel 等のアレゴリカルな解釈に立つ人々が一致して解釈したような「昼」と「夜」を分離する「門」ではない<sup>(67)</sup>。テキストには, 「分離」と読解されるべき手がかりはまったくない。それは「夜」と「昼」の「道の」(κελεύθων, 属格)「門」である。Fränkel 等は, パルメニデスの旅が闇から光明への, 非真理から真理への, 「夜」から「昼」への認識の「上昇」の旅であるとする「先言措定」をするために, この「門」は, 「夜」と「昼」とを分つそれ, 「夜の国」と「光の国」(Reich der Licht) を分つ門であると頭から決めてかかったのであった。そして, 「夜」から「昼」への, つまり「暗い地上的な感性的領域」から「明るい真理の国」への「上昇」とは, 天空への旅, つまりアナバシスであると主張することにより, 彼らは自分たちのアレゴリカルな解釈の次元とテキストの言語が即自的に表現する次元を混同してしまった。かくして, 彼らのテキストのアレゴリカルな解釈自体がテキストのアレゴリーとなってしまったのである。

ところで, 「夜」と「昼」の通う道の門とは何であるか。ヘシオドスの『神々の系譜』の読者なら誰しも, その 746—750 の「その(「夜の家」Νυκτός οἰκία V. 744) 前方には, イアペトスの息子(アトラス)が頭と疲れることを知らない腕で広大な天を支え, みじろぎもせず立っている。そこにおいて, 『夜』と『昼』とはそば近くまで歩み寄り, 互いに挨拶を交わし合うのであった, 巨大な青銅の敷居を越えながら」(τῶν πρόσθ' Ἰαπετοῖο πάς ἔχει οὐρανὸν εὐρὸν ἔστηώς κεφαλῇ τε καὶ ἀκαμάτῃσι χέρεσσι νύξ τε καὶ Ἡμέρη ἄσσον ἰοῦσαι ἀλλήλας προσέειπον, ἀμειβόμεναι μέγαν οὐδὸν χάλκεον) という言葉を想い出すであろう。そして, 「夜」と「昼」の双方は, 一方がいままさに家の中へと下って入って行こうとしているとき, 他方は扉から出てくるという関係にあったことを想い出すにちがいないのである。その「家」(δόμος, V751)

## パルメニデスのルート

は双方（「昼」と「夜」）を同時には入れておきほしないのであって、一方が家の外にあって地上を通過している間、他方は家（「夜の家」）に留まって、自分の旅する番がやってくるのを待っているのである（V. 750—754）。

「夜の家」、アトラスが天空を支える「夜」と「昼」の通過する場所、これらは十分にパルメニデスの「夜の家」、「夜と昼の通う門」との一对一对応を思わせる。そして、ひとたび、そういう眼でヘシオドスの『神々の系譜』を読み直してみると、たんに偶然とは思われない対応関係が、パルメニデスの序歌との間に成り立っていることが確認されるのである。

P.-E. は、先に紹介しておいたように、パルメニデスの序歌とヘシオドスの *Theog.* 736—766 の間には、たんなる偶然とは思われない字句上・文体上・観念上の対応関係が成り立っており、したがって、パルメニデスは、その当時において流布していた *Theog.* 736—766 のヴァリエーションを知っていたにちがいない、その箇所を念頭に置いてみずからの序歌を作ったのであろう、と推定する。

その推定の根拠のうちめばしいものは：

### I

Palm. 29 ἤμὲν Ἀληθείης εὐκυκλέος ἀτρεμῆς ἤτορ  
30 ἥδὲ βροτῶν δόξας, ταῖς οὐκ ἐνί πίστις ἀληθείης.

Hes. *Th.* 27 ἴδμεν ψεύδεα πολλὰ λέγειν ἐτύμοισιν ὁμοῖα,  
28 ἴδμεν δ' εὖτ' ἐθέλωμεν ἀληθέα γηρόσασθαι.

### II

Parm. 9 Ἡλιάδες κοῦραι προλιποῦσαι δώματα Νυκτός  
10 εἰς φάος ὠσάμεναι κράτων ἄπο χερσὶ καλύπτρας

Hes. *Th.* 9 ἐνθεν ἀπορνούμεναι κεκαλυμμέκαι ἥερι πολλῶ  
10 ἐννύχαι στείχον περικαλλέα ὅσσαν ἰεῖσαι.

III

- Parm. 17 ἀπτερέως ὥσειε πυλέων ἀπο' ταῖ δὲ θυρέτρων  
 18 χάσμ' ἀχανὲς ποίησαν ἀναπτάμεναι πολυχάλκους
- Hes. Th. 740, 1 χάσμα μέγ', οὐδέ κε πάντα τελεσφόρον εἰς ἐνιαυτὸν  
 οὐδ' αὖτε ἴκοιτ' εἰς πρῶτα πυλέων ἐντοσθε γένοιτο,

IV

- Parm. 14 τῶν δὲ Δίκη πολύποινος ἔχει κληῖδας ἀμοιβούς
- Hes. Th. 746 τῶν πρόσθ', Ἴαπετοῖο πάϊς ἔχει οὐρανὸν εὐρὺν

のそれぞれに、かなり厳密な対応関係が成り立っていることによる。<sup>(68)</sup>

Iにおいて、Parm. が「真理のまんまるい不動心をも、また、まことの確信のない死すべき人間どもの臆見をも」と言うのに対し、Hes. は「わたしたちはたくさんの嘘をまことしやかに話すこともできますが、しかしまた、その気になれば、わたしたちは真実をも話すことができます」と言う。そして、そう言っているのは、ともに歌うたう女神である。

IIにおいて、Parm. が日の乙女子たちについて *προλιποῦσαι* でその運動を叙述するのに対し、Hes. は *Μοῦσαι* (ムーサイ) が出かけて行く運動を同じ分詞形で *ἀπορνούμεναι* で叙述する。しかも Parm. での乙女子たちが「夜の家」を発して「光の方へ」向ってゆくのに対応して Hes. のムーサイも濃いもやにすっぽり包まれて夜 (*κεκαλυμμέναι ἡέρι πολλῶ ἐννόχαι*) 出かけて行く。

IIIにおいて、Parm. が門の開扉によって「広大な口」(*χάσμ' ἀχανὲς*) がひろげられたと語るのに対し、Hes. も六脚韻律詩の同じ冒頭において「巨大な口」(*χάσμα μέγ'*) について語り、両者とも「門」(*πυλέων*) を六脚韻律詩の同じ場所に置いている。ヘシオドスはその門について、ひとたびひとがその門の中に入ったものなら、丸一年かかってもその底に達することはないだろう、と語っていることに注目すべきである。これは下界の叙述である。

IVにおいて、Parm. が *πολύποινος* ディケーがその門の *κληῖδας ἀμοιβούς* を

パルメニデスのルート

もっている、と語るのに対し、Hes. はその（「夜の家」）前方（手前）にイアペトスの息子が広大な天を支えていると語る。これはまったく異なる描像であると考えられるかもしれないけれども、文体上・韻律上 Parm. の τῶν…ἔχει と Hes. の τῶν…ἔχει, そして, Parm. の κληΐδας と Hes. の παίς とは対応しあっている。

このような両者の対応関係を確かめていくことによって、P.-E. はパルメニデスの序歌とヘシオドスの *Th.* 736—66 の間には次のような緊密な関係が成り立っている、と結論づける：

Parmenides	Hesiod
the relation φέρειν—ἐκάνειν	
1 φέρουσιν…ἐκάνοι	741,2 ἔκοιτ'…φέροι
25 φέρουσιν ἐκάνων	
1, 2 ὅσον τ'…ἐκάνοι…ὁδὸν	754 ὄρην ὁδοῦ, ἔστ' ἄν ἰκηται
2 πολύφημον	755 πολυδερκές
4 πολύφραστοι	
14 πολύποινος	
18 πολυχάλκους	
9 δώματα Νυκτός	744'(58) Νυκτός…οἰκία
10 κράτων…χερσὶ καλύπτρας	754,7 κεκαλυμμένα…κεφαλῆ…χέρεσσιν 756,7 χερσὶ…κεκαλυμμένη
11 ἐνθα initial position	756,8 ἐνθα initial position
11 Νυκτός τε καὶ Ἴηματος	748 Νύξ τε καὶ Ἡμέρη
12 ἀμφὶς	748 ἀμφὶς (b. Σ. k. Q and Ua.c.)
12, 3 οὐδὸς (final position)… μεγάλοισι θυρέτροις (final position)	749/50 μέγαν οὐδὸν (final position)… θύραζε (final position)
14 τῶν…ἔχει κληΐδας (prosody)	746 τῶν…παίς ἔχει (prosody παίς)
14 ἀμοιβούς. 19 ἀμοιβαδὸν	749 ἀμειβόμεναι
17 ἀπτερέως (initial position)	748 ἀστεμφέως (initial position)

17, 8 optat. πυλέων…χάσμα (χάσμα initial position)	740,1 χάσμα…optat…πυλέων…optat. (χάσμα initial position)
22 χείρα δὲ χειρί	742 θύελλα θυέλλης
29 ἤμην Ἀληθείης…ἦτορ	755 ἦ μὲν ἐπιχθονίοισι…φάος
30 ἦδὲ βροτῶν δόξας	756 ἦ δ' Ἵπνον
29 ἀτρεμές ἦτορ (ἦτορ final position)	764 χάλκεον…ἦτορ (ἦτορ final position)
32 παντὸς πάντα περῶντα	738 πάντων πηγὰ καὶ πείρατ'

ただし、上掲の表において、*Th.* 748 における ἀμφίς は、ふつうのテキストにおいては、先に私がその箇所の読みとして掲げたように、*ἄσσον* となっていることが多い。P.-E. は、しかし、かならずしも確定していないこの箇所の読みに関して、おそらく *Hom. Od.* 10.82—6 における影響によって改変されたと思われるこの *ἄσσον* という読みを採らず、それ以前の伝承を保存すると思われる b, Σ, k, Q, U の ἀμφίς を採ったものである。つまり、P.-E. は *Th.* 748 f. を次のように読む：

*Th.* 748 ……., ὅθι Νύξ τε καὶ Ἡμέρη ἀμφίς ἐοῦσαι  
ἀλλήλας προσέειπον ἀμειβόμεναι μέγαν οὐδὸν  
χάλκεον ἢ μὲν ἔσω καταβήσεται, ἢ δὲ θύραζε  
ἔρχεται, ……

さて、P.-E. はパルメニデスとヘシオドスとの間に成り立つこのような対応関係を確認したうえで、次に、ヘシオドスにとって「夜の家」がどこにあるか、「夜」と「昼」の道とは何か、「門」はどこにあるかを規定する。その議論のエッセンスを要約しよう。<sup>(69)</sup>

1. アトラスは西方の地の涯に居る (*Th.* 517—518)。それは門の象徴である。

2. アトラスは「夜の家」の手前に立っている (*Th.* 746)
3. アトラスの門を越えたところには巨大なカスマ (*χάσμα*) がある (*Th.* 740—741)。
4. カスマには「底」がある (*Th.* 741)
5. 「そこで (アトラスの門のところで) 『夜』と『昼』とは、巨大な青銅の敷居を越えようとするとき、互いに、反対な位置にあって (*ἀμφὶς ἐούσαι*), 挨拶を交わしあうのであった」 (*Th.* 748—749)
6. 『夜』と『昼』とは、一方が *καταβήσεται* するとき、他方は戸口から出てくる (*Th.* 750)。
7. 『夜』と『昼』とは、同時に、「夜の家」に居ることはない (*Th.* 751)。

さて、1と2が認められるなら、「夜の家」はアトラスの門の向う側、つまり西側にあることになる。3が認められるなら、アトラスの門を西側に越えたところにカスマがあることになる。ところで4である。つまりカスマはたんなるひろがりではなく三次元的に下方へとひろがった空間である。すなわち、門をくぐりぬけた者は「下方へ」運動する。5は、日没および夜明け時に、東西の両極にあって、一方では日没時に沈みゆこうとしている「昼」の光を「夜」が、他方では夜明け時にしりぞいてゆく「夜」を東にあって昇ってくる「昼」の光が互いに認め合う、ということである。6における「一方が *καταβήσεται* するとき」云々の *κατά* は「下方への運動」を示唆する。また、この動詞が未来時称であることは、「アトラスの門」と家との間に距離があることを示唆する。つまり、「アトラスの門」は「夜の家」の領域の「エントランス・ゲート」である。ところで、5はヘシオドスの円盤状の大地のすべての縁とアトラスの門の敷居が同じものであることを含意する。また、4、6、7は「夜の家」が地下世界の全域であることを含意する。

パルメニデスの序歌とヘシオドスの *Th.* 736—766 の間の対応関係、なかんづく、1) パルメニデスの *δῶματα νυκτός* = ヘシオドスの *Νυκτός οἰκία* 2) パルメニデスの *χάσμα* = ヘシオドスの *χάσμα*, 3) パルメニデスの門の守り手はヘシオドスのアトラスの門ではないが文体上対応するということを確認し、さら

に比較の参照基準となるヘシオドスの「夜の家」, 「アトラスの門」, 「夜」および「昼」の解明を行なったうえで, P.-E. はいまやパルメニデスの序歌全体の解釈に向う。

序歌解釈上, さらに考慮されなければならないのは, (1) Parm. V. 13 の *αἰθέρααι* が “reaching up to the heaven” を意味するということ, (2) V. 22 の女神の identity について, それを門の守り手であるディケーと同一視してはならないこと, なぜなら, ディケーは「柔かい言葉」でもって説得されなければならないが, 他方女神は *πρόφρων* (ねんごろ) に詩人を受け入れるということ, また, ディケー自身が「おまえを私のところによこしたのは悪いモイラではなくてディケーとテミスである」(V. 26—28) と言うのは変であるから, (3) 女神の発言の中の「悪いモイラ」とは「死」を意味しうるということ, これら三つの要因だとした上で, P.-E. は次のようなルートを考える。

すなわち, 日の乙女子たちは「夜の家」を離れ, 上方へ, 地上の領域へと出, 地上から詩人を連れて, ヘシオドスの歌うアトラスの門に似た門を通る。最後に彼らは, 死が詩人を連れてゆくこともありえたところのひとつの家へと導き入れる。すなわち, *δώματα νυκτός=ἡμέτερον δῶ* であり, この旅はアナバシスではなくてカタバシスなのである。では, 啓示の女神は誰であるか。ヘシオドスによれば, 「昼」と「夜」とは, 両方が同時に「夜の家」に居ることは決してない。ところで, 「詩人に歓迎の言葉を投げかける者=主人」であり「その家の主人=*Ἡμέρη*」であるとすれば, パルメニデスに啓示を与えるのは, 日光の人格化たるこの女神以外にはない。つまり, 「女神の道 (*ὁδὸς δαίμονος*, V. 2—3)」=「『昼』の道 (*Ἡματός κέλευθος*, V. 11)」であり, それゆえにまた, 「女神 (*δαίμων*, V. 3)」=「昼 (*Ἡμαρ*, V. 11)」=「女神 (*θεά*, V. 22)」である。すなわち, パルメニデスの旅は次のようにして完結する。ディケーの門を発した(女神+日の乙女子たち+詩人+馬から成る)一行は, 目下のところ女神の住居である「夜の家」に到着し, こうして, 一行の長であり乙女子たちの主人である女神は, 若者パルメニデスをねぎらって, 歓迎の言葉を投げかけるのである。<sup>(70)</sup>



## パルメニデスのルート

私は、「昼 ( $\text{Ἕμμερ}$ )」が啓示の女神であるとする P.-E. の結論を認めない (その理由は後で述べる)。その結果、また「女神の道 ( $\text{ὁδὸς δαίμονος}$ , V. 2—3)」が「『昼』の道」であるということも認めない。しかし、パルメニデスの  $\text{δῶματα νυκτός}$  がヘシオドスの  $\text{Νυκτός οἰκία}$  に対応する地下世界であり、V. 9 において日の乙女子たちが後にしたのはこの地下世界にある彼女らの家であり、詩人を連れて彼女らが向ったのは、アトラスの門に似た西方のディケーの守る門であり、その門を通過して、彼女ら一行がさらに旅するのは下方の地下世界へであるということ、つまりこの旅はサイクリックなそれであるという P.-E. の結論を認める。

かくして、パルメニデスの旅は、Kranz が主張したように西から東への旅ではなくて、東から西への旅である。しかも多分日の出とともに東の或る地点から出発し (その地点においてパルメニデスは日の乙女子たちに遭遇する)、太陽の軌道を経て、日没時にディケーの守る門を通る旅である。それは「昼」の通う道に沿っての旅である。しかし、「『昼』の道 ( $\text{Ἕμματος κέλευθος}$ )」はただちに「女神の道 ( $\text{ὁδὸς δαίμονος}$ )」ではない。なぜか。女神の道は「『夜』と『昼』の道 ( $\text{Νυκτός τε καὶ Ἕμματος κέλευθα}$ , V. 11)」だからである。なぜか。V. 22 の啓示の女神は「『昼』と『夜』を同時に支配する女神であり、その女神の住居には双方の道が通じていると考えられるからである。では、何故、P.-E. の主張するように、啓示の女神 = 「昼」であってはならないのであろうか。

この問いに答えるのは、現在は、適當ではない。V. 22—32 の解釈時に行なうのが適當であろう。

さて、われわれはいま一度パルメニデスの門の記述に立ち帰り、これを詳しく観察してみることにする。「天にもとどく」( $\text{ἀθέραι}$ ) その門の敷居は石でできている ( $\text{λάινος οὐδός}$ , V. 12)。そして巨大な (複数の) 門扉 ( $\text{μεγάλοισι θυρέτροισι}$ ) によって閉ざされている。そして、その閉ざされた門扉の  $\text{κληῖδας ἀμοιβούς}$  (複数) を  $\text{πολύποινος Δίκη}$  が持っている。そして、この巨大な門を開扉するには、それを閉ざす  $\text{βαλανωτὸν ὄχημα}$  (単数) をはずさなければなら

ない。

いったい、この門の仕組みはどうなっているのか。そして、なぜ *Δίκη πολυ-ποινος* がその門を守っているのか。なぜ彼女は複数の鍵をもっているのか。

門の敷居が「石」でできていることについては、それが大地に根ざしていることを意味するととってよいであろう。<sup>(71)</sup>しかし、門扉や開閉の仕組みはどうなっているのか。

乙女子たちが *Δίκη* に向って、その門を閉ざしている *βαλανωτὸν ὄχηα* をすぐさまはずして欲しいと説得したのを、われわれはすでに見た。それにつづく場面はこうなっている。

*ταὶ δὲ θυρέτρων*

*χάσμι' ἀχανές ποίησαν ἀναπτάμεναι πολυχάλκους*

*ἄξονας ἐν σύριγξιν ἀμοιβαδὸν εἰλέξασαι*

<sup>20</sup> *γόμοις καὶ περόνησιν ἀρηρότε'*

「すると、門は、鋳や釘で打ち固められ、青銅を装備したわき柱を、軸受けの中で交互に回転させて飛び開き、広大な口を現した」。

Diels の解明<sup>(72)</sup>によれば、軸受け (*σύριγξ*) の中で回転するわき柱 (ないし軸柱, *ἄξων*) の下部は突出していて丸くなっている。また傷み易いところであるから金具でもって覆われている。扉は、このわき柱を支点にして回転するわけである。わき柱も軸受けも複数形で表現され、扉も複数形であるから、二枚扉の門なのであろうか。それら二枚の扉が、まず一方が開き、次いで他方が開くというふうに、交互に (*ἀμοιβαδὸν*) 開く。これはすなわち、一方の扉を開けなければ他方は開けられないようになっている門なのであろう。われわれは、仏の尊像を納めてある厨子のようなものを想像すべきなのかもしれない。しかし、厨子の場合、外側から門がかかりさらに錠が施される。この門の場合は、おそらく、門の内部になんらかの施錠装置があるのであろう。すると、それは普通の家庭にもみられる二枚扉の門のようなもので、一方の扉は固定され

ていて、通常はもう一方の扉のみを使って出入りを行なう、あの種の門扉を考えるべきかもしれない。そして、もちろんこの場合にも門が施される。

このような通常の門扉を考える場合、複数の鍵を施錠するということはない。しかるに、この門を守るディケー女神は *κληῖδας ἀμοιβούς*, すなわち *ἀμοιβός* という形容詞のつく複数個の鍵を持っている。ところで、このディケーに向って、日の乙女子たちは「すぐさま *βαλανωτὸν ὄχῆα* をはずして欲しい」と頼む。これは単数である。*βάλανος* というのはどんぐりのような形をした「留め金」である。*ὄχεύς* はいわゆる「門」に当るであろう。すると、*ὄχεύς βαλανωτός* というのは「留め金つきの門」とでもいうことになるのであろうか。しかし、この「留め金つきの門」と女神の持つ複数形での *κληῖδας ἀμοιβούς* とはどのように関係し合うのか。*ἀμοιβός* のもつ「交互に」の意味から「開け閉てする」という意味を Diels<sup>(73)</sup> は引きだした。これに対し、Flänkelは「報復の」という意味を引き出した。“Dike lohnt durch Öffnen des Tors, und straft indem sie es vor dem Eingang Suchenden verschlossen hält.” Tarán<sup>(75)</sup> も同様：“if Dike is the punisher of evil and the rewarder of good, it is understandable that keys which open and close reward and punish.” Guthrie<sup>(76)</sup> は“has charge of”の意味をみいだした。これらの解釈に共通しているのは「交互に」という意味を持つ *ἀμοιβός* からの隠喩的意味の抽出ということであろう。

しかし、扉を「開け閉て」するのに、普通の場合、二つの鍵は用いない。ひとつの鍵でわれわれは扉を開けもし閉めもする。Kirk & Raven<sup>(77)</sup> は *κληῖδας ἀμοιβούς* を“the double bolts”と訳した。つまり、彼らの解釈によれば、*κληῖδας* は「鍵」ではなく「門」、それも二重になった「門」であると解したわけである。女神ディケーは二重になった門をコントロールしているわけである。その先例にしたがって Mansfeld<sup>(78)</sup> は三重門を案出している。“Die zwei an der Innenseite des Tores angebrachten Balken greifen ineinander und zwar so, daß sie das Tor schließen, wenn sie befestigt sind. Diese Befestigung wird von einem (dem) *ὄχεύς βαλανωτός* besorgt. Dies kann ein dritter Balken

sein, der mittels Stiften die beiden anderen Balken verbindet und der in die Mauer geschoben werden kann.”

これらの解釈はみなどこかまちがってはいはしないだろうか。たとえ、もし、彼等のような解釈が出来るにしても、テキスト全体の中で、それらの解釈はどのような意味をもつのであろうか。

「鍵」を門扉との関係においてのみ捉えることから、以上のような解釈が出て来るのだと、私は考える。門の構造そのものを考え直してみる必要がある。この門は「二重門」なのではないか。われわれがギリシアにおいて知る有名な二重門は、言わずとも知れたケラメイコスの「ディピュロン」であるが、そのディピュロン同様に、このディケーの門もまた二つの通路をもつ門だったのではないか。この推測は根拠のないものではない。というのも、この門は、すでにわれわれが見てきたように、「『夜』と『昼』の道の門」(πόλαι Νυκτός τε καὶ Ἡμέρας κελεύθων, V. 11), すなわち複数の道がそこを走っている門だったからである。人々は、なぜ、この箇所を「『夜』と『昼』とを分つ門」と読んだり、「『夜』と『昼』の門」と読んだりするのであろうか。字義通り読めば、それは二つの道がひとつになることなしに通じている門なのである。すなわち、「二つの通路を持つ門」なのである。「夜」と「昼」とはそれぞれに専用門を持っているということになる。

ここでもう一度「アトラスの門」を思い起してみよう。Th. 746—747 :

τῶν πρόσθ' Ἰαπεττοῖο πάσις ἔχει οὐρανὸν εὐρύν  
 ἐσθήως κεφαλῇ τε καὶ ἀκαμάτησι χέρεσσιν

アトラスは、頭と疲れを知らない両腕で(κεφαλῇ τε καὶ…χέρεσσιν) 広大な天を支えている。このイメージを、たとえば、オリュンピアのゼウス神殿東側メトープにおけるヘラクレスの功業を描く浮彫に、あるいはシシリー島アクラガスのゼウス神殿人像柱に重ね合せてみよう。オリュンピアでは、ヘラクレスがアトラスに代って肘を曲げ、両手と頭とで天を支えている。アトラス型の彫

像はすべて、このように三つの支<sup>・</sup>点<sup>・</sup>によって天を支えているのである。分り易いイメージの例を挙げれば、法隆寺の南大門であろう。この門にあっては、中央の柱が吹きさらしになっている。この法隆寺の門に一对の二枚扉を付け加えさえすれば、われわれはパルメニデスの門に近いイメージを得ることができる、と私は考える。

アトラスの両腕と頭との間に出来る二つの通路のいずれかひとつを、「夜」と「昼」とはみずからの専用門として、日々の仕事にいそしむのである。パルメニデスがみずからの門の様式としてアトラスの門を採用したとするならば、その門はこうした二重門であったということは十分に考えられることである。私のこの考えがもし正しいとするならば、ディケー女神が二つの鍵をもっていたとしてもなんら不思議ではない。「夜」用の鍵は「昼」用の鍵ではないのだから。そして、日の乙女子たちのディケー女神に対する懇請が「(ひとつの) βαλανωτὸν ὀχῆα をはずして下さい」であったとしても、これまた何の不思議もない。彼女たちは、その本性からして、「昼」専用の門の前に立ち、その門の「留め金つきの門」をはずして欲しいと頼んだのであるから。その間、隣の「夜」専用門は閉されたままである。というのは、今は「昼」がみずからの門を使用する時刻であって、「夜」がみずから専用の門を使用すべき時刻ではないのだから。<sup>(79)</sup>

残る問題は、πολύποινος という形容詞をもつ女神ディケーである。なぜディケーがこの門を守っているのか。ποινήとは、殺した者が殺されたものに支払う“blood-money”であり、“satisfaction”であり、“requitai”であり、そして、ποινας τεῖσαιとは“to pay penalties”を意味する。<sup>(80)</sup> 一般に、ποινήは“recompense”, “reward for”, “redemption”を意味し、さらに、人格化されて“the goddess of vengeance”となる。πολύποινος Δίκηという表現は『オルフェウス断片』に一度現れている。<sup>(81)</sup> 「罰にきびしいディケー」というくらいであろうか。しかし、パルメニデスがその πολύποινος Δίκηという観念・表現をオルフィズムの伝統から採用したかどうかについては、よく分っていない。門を守る神としてディケーが登場する先例は、パルメニデス以前にはない。それゆ

えに、ディケーがパルメニデス解釈に占める比重は重い、とみなさざるをえない。ディケーは断片 I, V. 28 および断片 VIII, V. 14 にも現れる。これらのディケーがはたして同一のディケーであるかどうかも問題である。Fränkel<sup>(82)</sup>は、この箇所でのディケーを彼の κληῖδας ἀμοιβούς 解釈との連関裡に捉えた。すなわち、ディケーは入場を求める者に対し、門を開けることによって報い、門を閉ざしたままにすることによって罰するのであると。これはしかし、複数の「鍵」に対する解答とはなっていない。むしろ、鍵の「開閉」は、「昼」の軌道をやってきたパルメニデスに対する最後の試練であったであろう。たとえパルメニデスが「昼」の軌道をたどってディケーの門に到着したのであったとしても、だからといって自然・必然的に扉が彼のために開かれるとはかぎらないのであろう。それゆえにこそ、門を守る女神ディケーが πολύποινος (罰に鋭い) と呼ばれるのであろう。

ところでしかし、われわれがこの箇所のディケーによってただちに想起するのは、D.94 におけるヘラクレイトス断片：

*Ἥλιος οὐχ ὑπερβήσεται μέτρα·εἰ δὲ μή, Ἐρινύες μιν Δίκης  
ἐπίκουροι ἐξευρήσουσιν.*

(太陽はそのきまりを踏み越さないであろう。もしそうするなら、  
ディケーの手先であるエリュニエスが彼を見つけ出すであろう)

であるのではないか。エリュニエスとは復讐の女神である。彼女たちを使って太陽の運行をディケーは看視しているわけである。あるいは、われわれはまたアナクシマンドロスの断片 I：

*κατὰ τὸ χροῶν, διδόναι γὰρ αὐτὰ δίκην καὶ τίσιν ἀλλήλοισ τῆς ἀδικίας  
κατὰ τὴν τοῦ χρόνου τάξιν*

## パルメニデスのルート

をも想起すべきであるかもしれない。このアナクシマンドロスの断片は、コスモスの生成・消滅ないしはコスモスの秩序・組立てのサイクリックでダイナミックな運動にかかわるものだとされている。

いずれにしても、ディケーの問題は大問題である。われわれはいずれパルメニデスの断片 VIII を取扱う段階で、この問題に正面から立ち向わなければならぬであろう。しかし今は、パルメニデスの旅のルートを次のように場所的・時間的に規定したことを確認して、先に進むことにする。

T<sub>1</sub>：日の乙女子たちの出発点＝「夜の家」

「夜の家」の所在＝地下

「夜の家」の領域＝地下世界の全域

T<sub>2</sub>：日の乙女子たち＋詩人＋馬の出発点＝地上・東方の涯（?）

T<sub>3</sub>：日の乙女子＋詩人＋馬のディケーの門までの旅のルート＝「昼」の軌道  
道をノーマルにれどるそれ、すなわち、東から西への旅

T<sub>4</sub>：ディケーの門の位置＝西方の地の涯

T：門の構造＝「夜」と「昼」の二つの通路をもつ、天にとどく二重門

## V. 11—17の訳

そこに立てるは 「夜」と「昼」の	11
通う道筋なる 門柱	11
上つ楣 下つ石闕 抱きてあり。	12
アイテルのみ空にとどく	13
門そのものは 大いなる扉これを鎖して	13
畏くも罰に鋭き 女神ディケー	14
二つの鍵を手取るを	14
巧みにも日の乙女子ら	15
やさしの言葉 投げかけて	15
かくやは説きぬ 門の扉を	16

固く止めたる門を	16
いざはや はずし給はれと。	17

V. 17—21

ταὶ δὲ θυρέτρων  
 χάσμι ἄχανές ποίησαν ἀναπτάμεναι πολυχάλκους  
 ἄξονας ἐν σύριγξιν ἀμοιβαδὸν εἰλίξασαι  
 20 γόμοις καὶ περόνησιν ἀρηρότε· τῆι βὰ δι' αὐτέων  
 ἰθὺς ἔχον κοῦραι κατ' ἀμαξιτὸν ἄρμα καὶ ἵππους.

ここにはむつかしいことは何もない。そして、その一部はすでに検討済みである。ただ、ここに出てくる ἀμαξιτὸν (V. 21) についてだけ一言注釈を付け加えるならば、ἀμαξιτός とは “traversed by wagons” であり、それゆえに、ἀμαξιτός ὁδός とは「車道」であり「ハイウェイ」を意味することに注目しなければならない。つまり、詩人一行は、ディケーの門をくぐり抜けて、なおも「ハイウェイ」を直進 (ἰθὺς ἔχον, V.21) しなければならないわけである。女神への道にはなおも相当の距離があるということであろう。

V. 17—21の訳

されば門扉 <sup>もんび</sup> は たちまちに	17
巨 <sup>おお</sup> き口 裂きて開きぬ 軸受けに	17, 18
鋌と釘もて固めては	20
青銅 <sup>からかね</sup> の装 <sup>よそ</sup> いよろしき 軸柱 <sup>じくはしら</sup>	18, 19
交互 <sup>かたみ</sup> に廻 <sup>めぐ</sup> らせ 撥 <sup>は</sup> ね跳びて。	19, 18
それよ たまゆら	20
乙女子ら 門 <sup>かど</sup> を過 <sup>す</sup> ぐりて	21, 20



<sup>こま</sup> 駒の大道 <sup>ひた</sup> 直に行く	21
車と馬を もろともに。	21

V. 22—32

καί με θεὰ πρόφρων ὑπεδέξατο, χεῖρα δὲ χειρὶ  
 δεξιτερῆν ἔλεν, ὦδε δ' ἔπος φάτο καί με προσηύδα.  
 ὦ κοῦρ' ἀθανάτοισι συνάορος ἠνιόχοισιν,  
 25 ἵπποις ταί σε φέρουσιν ἱκάνων ἡμέτερον δῶ,  
 χαῖρ', ἐπεὶ οὔτι σε μοῖρα κακῆ προὔπεμπε νέεσθαι  
 τήνδ' ὁδόν. ἦ γὰρ ἀπ' ἀνθρώπων ἕκτος πάτου ἐστίν·  
 ἀλλὰ θέμις τε δίκη τε. χρεὼ δέ σε πάντα πυθέσθαι  
 ἡμὲν ἀληθείης εὐκυκλέος ἀτρεμῆς ἦτορ  
 20 ἥδὲ βροτῶν δόξας, ταῖς οὐκ ἐν πίστις ἀληθείης.  
 ἀλλ' ἔμπης καὶ ταῦτα μαθήσεται, ὥς τὰ δοκοῦντα  
 χρῆν δοκίμως εἶναι διὰ παντὸς πάντα περῶντα.

訳

されば女神は ねんごろに	22
<sup>あ</sup> 吾をば迎えて わが <sup>め</sup> 右手を	22, 23
手に執り給ひ かくのごと	23
<sup>こと</sup> 言の葉 <sup>は</sup> かけて 言ひ給ひけり。	23
おお 不死なる馭者を伴 <sup>とも</sup> として	24
<sup>いまし</sup> 汝を運ぶ <sup>こま</sup> 駒に駕し	25
はるけくも われらが家に到り着ける	25
<sup>わくごと</sup> 稚彦よ汝は <sup>な</sup> 幸 <sup>さち</sup> あれよ。	26
かく言ふは <sup>な</sup> 汝をこの道に送り来しもの	26, 27

そは げに 悪しき <sup>モイラ</sup> 運命にあらざれば。	26
けだしこは 人間どもの踏み迷ふ	27
小 <sup>こみち</sup> 徑を遠く 離 <sup>きか</sup> りてあれば。	27
さにあらず 汝 <sup>な</sup> の来ませるは	28
掟 <sup>テミス ディケー</sup> と正義 なせる業なり。	28
しかあれば よろずこと	28
探 <sup>たず</sup> ね求 <sup>と</sup> むべし 稚 <sup>わくごと</sup> 彦よ	28
真 <sup>またま</sup> 珠なす真理 <sup>ことわり</sup> の 不動心をも	29
青 <sup>あおぐさひと</sup> 草人の臆 <sup>おも</sup> ひをも ふたつながらに。	30
後 <sup>このもの</sup> 者に まことの <sup>よるべ</sup> 確信なけれども。	30
しかれども これをしも <sup>な</sup> 汝は学おべし	31
なべてのものを貫きて	32
なべてのものに <sup>ゆきわた</sup> 遍在りつつ	32
臆 <sup>ものもひ</sup> 断される ものごとの	31
げにこれこそは「有り」として	32
諾 <sup>うべな</sup> はれなむ 定め <sup>さだ</sup> 如何 <sup>いか</sup> にと。	31, 32

詩人パルメニデスは女神の家に到着する。すると、女神は彼をねんごろに(πρόφρων) 迎え、彼の右手を取って、「ようこそ、若者よ」(ὦ κοῦρῶν χαίρῳ) と言う。「右」は吉を表す<sup>(83)</sup>。してみれば、おそらく、パルメニデスが通ってきた二重門の通路もまた、ディケーの門に向って右の通路であったかもしれない。つまり「『昼』の道」とは右の道であったかもしれない。

女神は歓迎の意を表し、「この道をやって来るべくおまえをよこしたのは悪いモイラではなく、テミスとディケーである」と述べる。「悪いモイラ」(μοῖρα κακή) とは何を意味するのか。「死」であろう<sup>(84)</sup>。そして、「死者」を運ぶ道とは、「『夜』の道」であろう。ヘシオドス *Th.* 758—766 に、われわれは「夜」および「夜」の子供達について次のように言われているのを読む。

ἔνθα δὲ Νυκτὸς παῖδες ἐρεμνῆς οἴκῃ ἔχουσιν,  
 Ὑπνος καὶ Θάνατος, δεινοὶ θεοί· οὐδέ ποτ' αὐτοῦς  
 Ἥλιος φαέθων ἐπιδέσκειται ἀκτίνεσσιν 760  
 οὐρανὸν εἰσανιών οὐδ' οὐρανόθεν καταβαίνων.  
 τῶν ἕτερος μὲν γῆν τε καὶ εὐρέα νῶτα θάλασσης  
 ἦσυχος ἀνστρέφεται καὶ μέλιχος ἀνθρώποισι,  
 τοῦ δὲ ἀλθιγένη μὲν κραδίη, χάλκεον δ' οἶ ἦτορ  
 νηλεὲς ἐν στήθεσσιν· ἔχει δ' ὄν πρῶτα λάβησιν 765  
 ἀνθρώπων· ἐχθρὸς δὲ καὶ ἀθανάτοισι θεοῖσιν.

すなわち、そこ地下世界に、恐るべき神々、「夜」の子供たちである「眠り」と「死」は自分たちの家を持っていて、輝やく太陽(日)は、天に向って昇るときにも天から降りてくるときにも、彼らを見ることは決してしない、「夜」は太陽に比して、鉄の心臓、青銅のように無慈悲な心をもっていて、人間どもの誰であろうが、いったんこれを捉えたなら、決して離すことをしない、というのである。

パルメニデスを運んできたのは、「悪いモイラではない」。これが意味するのは、それゆえに、彼が、夜、「死者」として運ばれてきたのではなく、生者として、特別の認可を得た「エリート」としてやってきたということではなければならない。「夜」は、人間世界を蒙々たる「蒸気たちこめる」(Th. 756) 暗黒の雲におし包んで、「死者」を連れ去る。「夜」の道は、「人間どもの踏み迷う小径」に、本質的に近い。しかるに、「昼」の道は、「大地や海原の広大な背を下にして」運行する太陽の車の道である。それは人間どもの世界から遠く離れている。そしてその軌道は常に季節ごとに一定している。「太陽はそのきまりを踏み越さないであろう。もしそうするなら、ディケーの手先であるエリュニエスが彼を見つけだすであろう」(ヘラクレイトス、前出)から。

パルメニデスを女神のところに連れてきたのは「昼」の道、コスミックに循環する太陽の道を行く「日の乙女子たち」(Ἡλιάδες κοῦραι)である。彼女た

ちが、その「きまり」に従った仕事をするよう命ずるのは誰か。それはテミス、なかんづくディケー以外にはない。

ヘラクレスにとって、ディケーは、アディキア (*ἀδικία*) すなわち法の侵犯に対して下される刑罰であるとともに、事の曲直をそのものとして審判する「判決」でもあった。そして、さらにそれは、「争い」(訴訟事)をその本質的成分とする世界秩序の全体的パターンないし法則そのものでもあった(断片80)<sup>(85)</sup>。このヘラクレイトスのディケーについての考え方は、アナクシマンドロスの「不正に対する償い」を世界秩序維持の動力学とするコスモロジーを、大きく踏み越えたものであった。

パルメニデスを啓示の女神のところに連れてくるよう指令したディケー女神は、イオニアの伝統的コスモロジーにおける世界秩序維持の原理としてのディケーの面影を強くとどめている。啓示の女神がパルメニデスに、「さにあらず汝の来ませるは、掟と正義なせる業なり」というとき、それはなによりもまず、コスミックな法としての「掟」を遵守し、<sup>テミス</sup>きまりをはずすことなくやって来た、ということの意味するであろう。もしそのきまりをはずすなら、テミネの娘ディケー(ディケーはテミスの娘ホーライのうちの一)は復讐の神となり、ただちに罰を加えるだろう。ディケーはエリュニエスの側面をもつと言わなければならない。しかし、ディケーは盲目的復讐神ではない<sup>(86)</sup>。その姉妹は、エウノミー (*Εὐνομία* 遵法)でありエイレーネー (*Εἰρήνη*, 平和)である (Hes. *Th.* 901 f.)。

ディケーは、われわれが先に見た二重門のそれぞれの通路に対応する二重の顔を持っているわけである。ギリシアにはディケーを門の守護神とする事例は見当たらないと言われる。門の守護神として誰が選ばれるかはさまざまであったが、ヘルメスが、二つの顔をもつということによって、とりわけ門の守護神として愛好されたという事実がある<sup>(87)</sup>。パルメニデスの場合は、その同じ理由が、女神による啓示に導くひとつの道の二重の相貌として表現されたのである。パルメニデスの門はヘルメスの門のように、出入において違った顔に出会う門ではない。その門は、むしろ、彼の哲学を根底から律している二者択一の

「排中」論理が「あれかこれかいずれかひとつ」というかたちで、二つの選択肢を出してひとつのみの選択を強要するように、二つの道の貌を前面にもった門なのである。

パルメニデスは、それら二つの貌をもつ門（二重門）のうち、法の守り手としてのディケーの門をくぐった。そのことによって彼は「死」から離れたのである。彼が選ばなかった道、すなわち「夜」の道とは、青草人の道、生え出てきてしばらくの生命は保っても、やがてはからからに涸びて亡んでしまう者の道、「死すべき者ども」（βρότοι）の道であった。βρότος とは、「流れ出して凝固した血」を元来意味した<sup>(88)</sup>が、その干からびた血になってしまう者の道、生まれてきては滅んで行く者、「ある」を「あらぬ」と同一でありかつ同一でないとする両頭の怪物のさまよい歩く道（断片 VI）、臆見の道であった。

この臆見の道には「真理」はない。その道は、死すべき者どもが「真理」だと信じこんでいるものにすぎない（断片 UIII. 39）。その臆見の道から、おまえは、みずからの思想を遠ざけよ（断片 VII. 2）。しかし、と女神は言う。これらの「すべてのことを、おまえは聞いて知るのでなければならない」、この私（＝女神）から。「まんまるい真理の不動心」がどこにあるかも、「死すべき者どもがもつ『臆見』」がなぜ生じてきたのかも。この「臆見」（δόξα）には、「ロゴス」で判定するならば（断片 VII. V. 5）、真にひとを確信させるに足るものはなにもないけれども。「それでもなおかつ」（ἐμπης）、これら臆見についても、これら臆見に対する「私の方から語られる論争に充ちた反論」（断片 VII. V. 5—6）を聞きつつ、おまえは学ばなければならないのだ、「いったいどうして」（ὡς, 間接疑問導入のそれ）それら死すべき人間・両頭の怪物どもによって「臆いなされることども」（δοκούντα）が、「なにからなにまで一財合財ひっくるめて」（διὰ παντός πάντα περῶματα）、真にこれらこそ（δοκίμως）は「有る」（εἶναι）などということにならねばならなかった（χρῆν）のであるかを。

女神は、「臆見」の道に肩入れしているのではない。むしろそれを弾劾しているのである。そしてこの弾劾は、パルメニデスに対する教導の意味をも持つ。迷いの道から遠ざかるためには、迷いが迷いたるゆえんを知らなければな

ない。真理を非真理から隔絶する道は、非真理の中を通り抜け、非真理のみかけの存立がいかなる点において成立するのか、その根拠を明らかにするのではない。女神が展開するコスモロジーは、プラトンの『パルメニデス』第二部が若きソクラテスに対して持ったと同様の意味を持つかもしれない<sup>(89)</sup>。彼女が展開してみせるコスモロジーは虚妄である。非存在である。しかし、どこにその虚妄が成り立つのか、その前提、前提から導出される帰結、諸帰結同志が結び合う結節点、それらの一々が造りだす「みかけの上での全世界構造」(διάκοσμον εἰκότα πάντα, 断片 VIII. 60) を明らかにし、ロゴスによってこれを吟味する (κρίναι δὲ λόγῳ) 仕方を心得ておくならば、「死すべき者のいかなる見解といえども、おまえを凌駕することは決してないであろう」(断片 VIII, V. 61)。

このようにして、序歌は完結し、パルメニデス思想の全体の輪廓は描かれ終わった。だが、パルメニデスにその啓示を与えた女神はいったい誰なのであろうか。

Sextus 以来<sup>(90)</sup>、V. 22 における啓示の女神をディケー (V. 14) と同一視する者は後を絶たない。Gilbert<sup>(91)</sup>、Deichgräber<sup>(92)</sup>、Falus<sup>(93)</sup>、Mansfeld<sup>(94)</sup> 等がそうである。しかしまた、Kranz<sup>(95)</sup>、Gigon<sup>(96)</sup>、Guthrie<sup>(97)</sup> のように、「太陽」ないし「昼」ないし「日光」をこの啓示の女神と同一視する者も少くない。しかし、啓示の女神はこれらのいずれでもありえない。

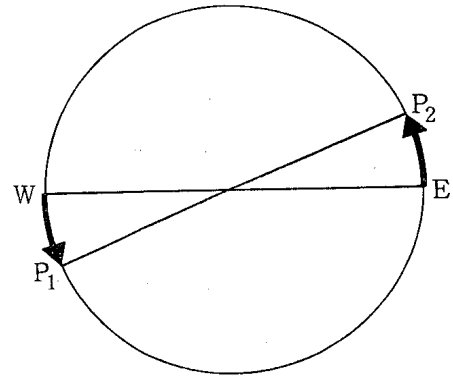
P.-E.<sup>(98)</sup> が、ディケー女神と啓示の女神との同一性を、(1)門番と主人は同一でありえない、(2)ディケーのほうは「やさしの言葉」でもって説得されなければならないが、啓示の女神のほうは「ねんごろに」若者パルメニデスを受け入れるという事実により、否定したのをわれわれは見た。そして、さらに、彼が「昼」を啓示の女神と同定したのを見た。

「昼」と「夜」は、そのコスミックな循環プロセスにおいて、交互に「夜の家」をみずからの住居とする。その昼夜交替劇において、彼らが同時に「夜の家」に居ることは決してない。すなわち、「昼」と「夜」は交互に「夜の

家」の主人なのである。ところで、「詩人に歓迎の言葉をかける者＝主人」であり、「目下、その家の主人である者＝*ἡμέρη*」であるとすれば、パルメニデスに啓示を与えるのは、日光の人格化たるこの女神以外にはない、というのがその理由であった。

この所説は受け入れがたい。P.-E. も認め私も認める Hes. *Th.* 748—750 の解釈によれば<sup>(99)</sup>、「夜」と「昼」はそのコスミックな運動においてつねに対極の位置にある。しかも宇宙は球状をしている（少くともこのことをわれわれはパルメニデスについては認めざるをえない）<sup>(100)</sup>。さらに、ディケーの門から「われらが家」(*ἡμέτερον δῶ*) までは *ἀμαξιτόν* (=High way) によって連絡されなければならない距離がある。（地下世界の全域たる「夜の家」の中心部にある特定住居に啓示の女神は住んでいるのであろう）。さて、これらの前提を結合すると、「夜」と「昼」の双方について次のことが成り立つ。すなわち、いかなる場合にも、一方が *ἡμέτερον δῶ* に到達すると同時に他方が *ἡμέτερον δῶ* を出立することは不可能ということになる。なぜなら、図において、たとえば「昼」が或時刻  $t_1$  にディケーの門に居て、

$t_2$  には *ἡμέτερον δῶ* に向う或る地点  $p_1$  に居るとき、「夜」もまた東方の極点から  $p_2$  へと、「昼」が動いたのと同じ距離だけ、動いていなければならないからである。すると、ヘシオドスの「いかなるときにもその館は彼女たちを二人とも中へ入れておくことは決してしない」(*οὐδέ ποτ' ἀμπετέρας*



*δόμος ἐντὸς ἔεργει*, *Th.* V. 751) どころか、*ἡμέτερον δῶ* には、「昼」も「夜」もいない空白の時が生ずることになる。たとえば、「昼」が *ἀμαξιτόν* を通って *ἡμέτερον δῶ* に達するまでの全時間がそれである。その時間のあいだ、*ἡμέτερον δῶ* は「主な家」とならざるをえない。

この「ミス」は、神話論理のミスであって、そもそも、そういうことを言うならば、元来、コスミックな循環運動のなかで、ひとときといえども静止して

はならないはずの「昼」と「夜」の役割分担において、彼らの「家」を想定すること自体がおかしいのだと、言われるかもしれない。「家」は、彼らがそこに留まることを、つまり「静止」を含意するからである。

しかし、仮りに、この批判点については措くとしても、「夜」と「昼」のサイクリックな運動の前提の下で議論するときには、

1) *καὶ με θεὰ πρόφρων ὑπεδέξατο* (V. 22) は無意味となる。*ὑποδέχομαι* の使用例には、自分といっしょにいる人物を *πρόφρων* に *ὑποδέχομαι* するといったものはみいだされない。

2) P.-E. は、「昼」は常住に光の中におり、自分のいるところつねに「夜」はないのだから、「夜の家」を「われらの家」と言ってもおかしくはない、と言う。しかし、その同じ理由によって、地上もまた「われらの家」であってよいはずである。

3) 「昼」を啓示の女神と同一視することは、この女神が「臆見」(ὀόξα) として展開するコスモロジーといちじるしく抵触する。断片 IX によれば、「光」は、この、弾劾されなければならない死すべき者どものコスモロジーの原理である。Verdenius<sup>(102)</sup> のように「純粋な光」の世界を、闇と二元的対立関係にある地上的な光から区別してみても無駄である。「純粋な光」もまた、しょせんは、死すべき人間どもの偽り多い仮構にすぎないからである<sup>(103)</sup>。

つまり、V. 22 に登場する女神は、ディケーでもないし、「太陽」や「昼」でもなく、まして「夜」では、なおさらのこと、ないということになるだろう。だとすれば、「女神の道」とは、「昼」の道でもないし「夜」の道でもないということにもなるだろう。それは、「昼」と「夜」をともに支配する道であるのかもしれない。この女神は、「昼」をも「夜」をも超越する神なのである。この神は、一人称で語る。それゆえに、彼女の口から放たれる論理は、すべて、強烈な「私」(ἐγώ) 性に根ざしている。Reinhardt<sup>(104)</sup> は、パルメニデスのうちに、完全な合理主義精神をみいだしたのであったが、そのいわゆる「合理主義精神」とは何であったか。かかる評価は、かえって、おのずからヨーロッパ的精神の無自覚的深層構造の所在を逆照射するものなのである。



われわれは、この序歌解釈においては、これ以上、啓示の女神の本性を追求することをしないであろう。その本性は、「真理の道」の解釈のなかで、おのずとわれわれに打ち開かれるかもしれない。その時点で、私は、いまひとたび、この啓示の女神のところに帰ってくることになるだろう。けだし、この女神にとっては、思惟の道は循環的であって、

断片 V.

いづこより 始めむとても  
吾にとりて そは同じなり  
けだし われ 出で立ちし地に  
またしても 帰り来むゆえ。

(ξυνὸν δέ μοί ἐστιν,

ὁπόθεν ἄρξωμαι. τόθι γὰρ πάλιν ἴξομαι αὖθις.)

ということになるからである。

この論考を終えるにあたり、パルメニデスのルートについて、われわれが到達した結論を概観する見取図を付しておく。

桃山学院大学人文科学研究

	テ ク ス ト	刻 限	場 所	運動の方向	登 場 人 物	留意すべき重要な語句
T <sub>1</sub>	σπερχοίατο πέμπειν' 'Ηλιάδες κοβραι, προλιποῦσαι δώματα Νυκτός,	夜明け前	地下世界 (「夜の家」の 領域)	「夜の家」 → 地上世界	日の乙女子たち 馬	εἰς φάος ὄσά μιναι...καλύπτρας προλιποῦσαι δώματα Νυκτός σπερχοίατο πέμπειν
T <sub>2</sub>	μ' ἐς ὁδὸν βῆσαν πολύφημον ἄγουσαι δαίμονος	日の出時	極東の地	地上世界 → 「昼」の軌道	日の乙女子たち 馬 パルメニデス	πολύφημον ἐς ὁδὸν δαίμονος
T <sub>3</sub>	ἵπποι ταῖ με φέρουσιν, ὄσον τ' ἐπὶ θυμὸς ἰκάνοι, πέμπον	昼間	「昼」の軌道	「昼」の軌道 → 「われらの家」	日の乙女子たち 馬 パルメニデス	φέρουσιν, ὄσον τ' ἐπὶ θυμὸς ἰκάνοι
T <sub>4</sub>	τὴν δὴ παρφέμεναι κοβραι μακακοῖσι λόγοισιν πείσαν ἐπιφραδέως	日没前	西の地の涯		日の乙女子たち 馬 パルメニデス ディケー女神	Δίκη πολύποινος κλήϊδας ἀμοιβούς μαλακοῖσι λόγοισιν
T <sub>5</sub>	ταῖ δὲ θυρέτρων χάσμ' ἄχανές ποιησαν	日没と同時	西の地の涯	内部へ開扉 (?)	二重門	πύλαι Νυκτός τε καὶ "Η ματός εἰσι κελεύθων λάϊνος οὐδός αἰθήρεια
T <sub>6</sub>	τῆι ρα δε' ἀπτεῶν ἰθὺς ἔχον κοβραι κατ' ἄμαξιτὸν ἄρμα καὶ ἵππους.	日没後	地下世界 (「夜の家」の 領域)	地下世界への 下降 → 「われらの家」	日の乙女子たち 馬 パルメニデス	κατ' ἄμαξιτὸν
T <sub>7</sub>	καὶ με θεὰ πρόφρων ὕπεδέξατο, χεῖρα δὲ χειρὶ δεξιτερὴν ἔλεν	深夜	地下世界 の中心部 (「われらの家」)		啓示の女神 パルメニデス	πρόφρων ; δεξιτερὴν; φέρουσιν ἰκάνων; ἡμέτερον δῶ ; μοῖρα κακῆ; ἀπ' ἀνθρώπων ἕκτος πάτου ; θέμις τε δίκη τε
T <sub>8</sub>	κατὰ πάντ' ἄστη φέρει εἰδῶτα φῶτα	夜明け前	地下世界 (「夜の家」の 領域)	地下世界 →人間界	日の乙女子たち 馬 パルメニデス	κατὰ πάντ' ἄστη φέρει εἰδῶτα φῶτα

〔注〕

- (66) Mansfeld, A. a. O. S. 246
- (67) Fränkel, A. a. O ; 井上 忠『根拠よりの挑戦』東大出版会, 1974, 39—73, 74—109) の解釈はまちがいである。
- (68) Pellikaan-Engel, pp. 6—10
- (69) Pellikaan-Engel, pp. 22—50
- (70) Pellikaan-Engel, pp. 51—62
- (71) Burkert, Das Proömium des Parmenides und die Katabasis des Pythagoras. *Phronesis* 14, 1969. S. 1—30
- (72) Diels, Sonderausgabe, S. 51—2
- (73) Diels, *VS* 1<sup>4</sup>, 1922, S. 149
- (74) Fränkel, A. a. O. S. 168
- (75) Tarán, A. a. O. S. 15
- (76) Guthrie, *AHGPh*. II., p. 82
- (77) Kirk & Raven, *The Presocratic Philosophers*, Cambridge, 1969, p. 267
- (78) Mansfeld. A. a. O., S. 242
- (79) Onians, R. B, *The Origin of European thought about the body, the mind, the soul, the world, time, and fate.*, Cambridge, 1951., pp. 411—415
- (80) Pindar, O. 2—58
- (81) O. F. 158
- (82) Fränkel, A. a. O. S. 168
- (83) Hom. *Od.* 2. ; *Il.* 24. 311 ; 24. 319 ; 24. 672 など。
- (84) Hom. *Od.* 11. 560 ; 21. 24 ; *Il.* 4. 517 ; 18. 119 ; 6. 488 など。
- (85) Kahn. Ch. H, *The art and thought of Heraclitus*, Cambridge, 1989. pp. 206—207
- (86) Kahn, A. a. O., p. 161
- (87) Maier, Torgötter, in : *Eranion, Festsch. Hommel*, Tübingen 1961, S. 83—104. Vgl. Mansfeld, a. a. O. S. 242—243
- (88) Onians, A. a. O., pp. 506—507
- (89) Vgl Plat. *Parmenides*, 135 C—136 A
- (90) Sextus *adv. M.* VII. 113—114
- (91) O. Gilbert, Die *δαίμων* des Parmenides. *Arch. Gesch. Philos.* 20, 1907, S. 24—45
- (92) Deichgräber, K. Parmenides' Auffahrt zur Göttin des Rechts. Untersuchungen zum Proömion seines Lehrgedichts (*Akad. d. Wiss. u. d. Lit. in*

- Mainz, *Abh. Geistes-u. sozialwiss.* Kl. 1958, 11). Mainz 1959.
- (93) R. Falus, Parmenides-Interpretationen. *Acta ant. Acad. Scient. Hung.* 8, 1960, S. 267 bis 294.
- (94) Mansfeld, A. a. O. S. 261 ff.
- (95) Kranz, Walther, Über Aufbau und Bedeutung des Parmenideischen Gedichtes, *Sitz. ber. Preuss. Ak. Wiss.* 1916, 1158 ff.
- (96) Gigon, Olof, *Der Ursprung der griechischen Philosophie, Von Hesiod bis Parmenides*, Basel/Stuttgart <sup>1</sup>1945, <sup>2</sup>1968. S. 29 ff.
- (97) Guthrie, A. a. O. p. 9 ff.
- (98) Pellikaan-Engel, A. a. O. pp. 51—52
- (99) Th. 748 の ἀμφὶς εἰδοῦσαί の読みについて, West, M. L, *Hesiod, Theogony*, edited with Prolegomena and Commentary, Oxford 1931, p. 367 は “*ἀμφὶς* may have been the reading known to Parmenides” と言う。
- (100) もちろん, 異論はある。たとえば,  
G. E. L. Owen, Eleatic questions. *Class. Quart.* 54, 1960, pp. 84—102.  
しかしまた, C. H. Kahn, *Anaximander and the origins of Greek Cosmology*. New York 1960. J. Kerschensteiner, *Kosmos. Quellenkritische Untersuchungen zu den Vorsokratikern* (Zetemata H. 30). München 1963. S. 80 ff.  
をも参照。
- (101) Hom. I 480 ; ≡ 357 ; β 387 ; ξ 54 ; υ 372 ; φ 314. Hes. E. k. ‘H 667 ; θ. 418 ff ; 419. hom. Hym. XXXI 17 ; XXXII 17 ; II 226 などを参照。
- (102) W. J. Verdenius, Parmenides’ conception of light. *Mnemosyne* 4, 2, 1949, pp. 116—131
- (103) 断片 VIII V. 53, Vergl. Mansfeld, A. a. O. S. 254 ff.
- (104) K. Reinhardt, *Parmenides und die Geschichte der griechischen Philosophie*. Bonn 1916, 2. Aufl. Frankfurt a. M. 1959.

(1983. 9. 13 受理)